

学級経営における学級通信の役割

鈴木 健二

教職実践講座

The Role of Classroom Correspondence in Classroom Management

Kenji SUZUKI

Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

学級通信は、学級経営の充実を図るために、どのような役割を担っているのかを明らかにすることが、本研究の目的である。

本研究では、研究テーマを解明する手がかりとして、学級経営を充実させるために、学級通信を、積極的、意図的に発行している教師を調査対象とした。

この調査の分析をとおして明らかになったことは、どの教師も、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」など、学級通信を発行する意図を明確に意識しているということである。この意識が、質の高い教育活動を生み出し、それが、学級経営の充実に大きな役割を果たす学級通信を創り出すということである。

Keywords : 学級経営、学級通信、保護者との連携

1 研究の目的

学級通信は、学級経営において、どのような役割を果たしているのか。

これまで、学級通信に関する書籍は、大きく次の二つの視点で出版されてきた。

- ① 学級通信づくりのノウハウに関するもの
- ② すぐれた教師の学級通信を書籍にしたもの

①に関しては、『学級通信活動のすすめかた』（原田、谷田川、1979）『学級通信づくり入門』（鈴木、1989）などがある。

②に関しては、『学級通信このゆびとまれ』（村田、1979）『学級集団形成の法則と実践 学級通信アチャラ』（向山、1984）、『法則化学級通信シリーズ1～12』（向山、1987）、などがある。

しかし、学級通信が、学級経営の充実に、どのような役割を果たしているのかについて言及しているものは数が少なく、最近では、『小学校もらってうれしい！学級通信のつくり方アイデア30』（上条、2009）や『子どもと保護者をとりこにするプロの学級通信』（河田、2009）などが見られる程度である。

そこで、学級経営を充実させるために、学級通信が

重要な役割を果たすと考えており、積極的かつ意図的に発行している教師を対象にして、「学級経営における学級通信の役割」を明らかにすることを目的に、本研究を行うことにした。

本研究では、学級通信を重視する教師が、どのような内容を取り上げて、どのように記述し、それが、学級経営の充実にどうつながっているのかについて、具体的な学級通信の例を挙げながら考察する。

本研究によって、学級通信のあり方だけでなく、学級経営を充実させるための重要な視点を明らかにしたい。

2 調査内容と調査結果

(1) 調査内容と方法

今回の研究の調査対象としたのは、学級通信を、学級経営の中で重要な役割を果たすものであると考え、週1回以上（もしくは、それに近い回数）発行している小学校教師12名である（いずれも筆者と実践的な交流の深い教師である）。

なお、今後、中学校教師への調査も実施し、今回の調査結果との比較検討も行う予定である。

教師の年代は、次のとおりである。

	低学年	中学校	高学年	特別支援	計
20代	2				2
30代		2	1		3
40代	1	1	4	1	7
計	3	3	5	1	12

(2) 調査結果

発行回数はどれくらいか (表1)

発行回数	人数
月1～3回	1
週1回	5
週2～4回	4
毎日	2

発行する目的は何か (表2)

目的	人数	優先順位				
		①	②	③	④	⑤
子どもとの信頼関係	8	1	2	2	3	
保護者との連携	12	7	3	1	1	
学級経営の充実	8	1	4	1	2	
教師の資質向上	8	3	1	3	1	
その他	1					1

目的は達成されているか (表3)

目的	人数	達成度			
		④	③	②	①
子どもとの信頼関係	8	2	4	2	
保護者との連携	12	2	9	1	
学級経営の充実	8	1	7		
教師の資質向上	8	3	2	3	
その他	1		1		

掲載内容は何か (表4)

掲載内容	人数	優先順位							
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
お知らせ	12		1	1	4	2	3	1	
授業の様子	12	5	2		4		1		
子どもの生活	12	6	5	1					
行事の様子	11		3	5	1	2			
教師の教育観	11		1	1	3	3	3		
教育情報	8	1		1			2	4	
教師の自己開示	12			1	1	5	3	1	1
その他	1			1					

工夫していることは何か (表5)

工夫	人数	優先順位				
		①	②	③	④	⑤
写真の活用	8	1	1	7	1	
イラストの活用	3	1		1	1	
子どもの様子の伝え方	10	7	4		1	
授業の様子の伝え方	7	1	6	2		
その他	4	2	1			1

3 調査結果の考察

(1) 発行の目的と達成度

保護者との連携

学級通信を発行する目的として、全員が選択しているのは、「保護者との連携を図る」である。

学級通信が対象としている主な読者が、保護者であることを考えれば、当然のことであろう。

保護者との連携という目的が達成されているかという自己評価は次のようになっている。

達成されている…2人

まあまあ達成されている…9人

あまり達成されていない…1人

達成度の自己評価は高い。

判断理由として、次のようなことが挙げられている。

1-1

「保護者から定期的に、学級通信について、学校の様子がよく分かる、教師の指導方針がよく分かると、手紙や会話の中で出てくる」

1-2

「懇談などで、学級通信の内容を話しても、すぐに伝わる、または、うなづく方が多い」

1-3

「行事等のあとに、感謝のコメントが半数程度の家庭から返ってくるようになった」

多くの教師が、学級通信に対する感想、学級懇談における保護者の反応、行事に対する感謝等、学級通信を発行しているからこそその保護者からの反応の手応えを感じている。

中には、次のような判断理由を挙げた教師もいる。

1-4

「先日、保護者からクレームをいただきました。その中に『通信を読むと、先生の子どもたちに対する熱い思いがよく伝わります』『せっかく子どもたちのことを一生懸命考えてくださっているのに、もったいないですよ』という一言がありました。これは、教師に対する理解（信頼）があればこそであり、通信が大きな問題となるのを未然に防いでくれたのでは

ないかと考えます」

学級通信が、保護者のクレームを緩和するという思わぬ効果を発揮したのである。

1名だけ、「あまり達成されていない」と評価しているが、その理由は「返信を期待せずに発行しているため」であり、連携が達成されていないというわけではないようである。

子どもとの信頼関係

「子どもとの信頼関係を高める」を選択した教師は6人である。

達成度は、次のような結果である。

達成されている…2人

まあまあ達成されている…4人

あまり達成されていない…2人

ここで目を引くのは、「あまり達成されていない」と自己評価した教師が2人いるということである。

2人の教師は、判断理由として、次のようなことを挙げている。

2-1

「子どもとの信頼関係は、直接的な関わりによってできる部分の方が大きいと思う」

2-2

「一年生には、分かりづらい部分が多いから」

ただ、一年生を担任している教師（2-2）は、「写真や児童の作文、作品、微笑ましい出来事などを通信で紹介はしているが、児童に配布する前に、もっと活用できると良いと考えて」おり、「子どもとの信頼関係を高める」ための活用の仕方に課題があると感じている。

一方、「達成されている」と自己評価した教師は、次のように答えている。

2-3

「写真を多用していることもあり、頑張ったことやできなかったことができるようになったときなど、『通信に載せる?』とうれしそうに尋ねてくることが多いため」

この教師は、特別支援学級担任であり、少人数の学級で一人一人の成長を、写真を活用して、視覚的に実感させることによって、教育効果を高めようとしているのだと考えられる。

また、「まあまあ達成されている」と自己評価した教師は、次のように答えている。

2-4

「学級全体の成長やある子の良さを学級通信で紹介する度に、子どもたちがますます意欲的な学校生活を送るようになっていく」

2-5

「教師が言ったことを実行しようと努力する姿が見えるようになってきたので」

2-6

「『先生は見てくれている』というメッセージを伝えることはできていると感じています。教師の考えや思いを公的に文字にして、子どもたちに読み聞かせることで、教師との信頼関係を結ぶことができていると考えます」

「子どもとの信頼関係を高める」という目的に対して、自己評価の高い教師は、子どもの姿の変容から、学級通信による効果を確かな手応えとして感じているようである。

学級経営の充実

「学級経営の充実を図る」を選択した教師は8人である。自己評価は、次のようになっている。

達成されている…1人

まあまあ達成されている…7人

判断理由として挙げられているのは、次のような内容である。

3-1

「通信で紹介された友達のがんばりを見て、『〇〇君、すごいね』等、認め合う雰囲気が高まった。4月初は、できない友達をからかう場面が見られた」

3-2

「自分のことが書いてあると嬉しそうにする。読み聞かせてくれる保護者もあり、率先して手伝いをするなど、行動に変容が見られた児童もいる」

3-3

「教師が、子どもたちの行為を価値付けしていく上で、重要なツールだと考えています。ここで価値付けた行為が、例えば、子どもたちの日記や作文、日頃の言動等に表れてきていると感じています」

友達のよさを認め合う雰囲気が醸成されたり（3-1）、自己肯定感の高まりにつながったり（3-2）、教師の教育観の浸透により、子どもの言動に変容が表れたりする（3-3）等、学級経営の充実に手応えを感じている。

教師の資質向上

今回の調査で目を引くのは、「教師としての資質を高めるため」を目的の一つとして選択している教師が8人もいるということである。しかもそのうちの4人は、優先順位の2位までに挙げている。

達成度は、次のような結果である。

達成されている…3人

まあまあ達成されている…2人

あまり達成されていない…3人

興味深いのは、「教師としての資質を高めるため」を目的としている教師の半数が、「あまり達成されていない」という厳しい評価をしていることである。

判断理由として、次のような内容が挙げられている。

4-1

「向上したかと問われれば、日々追われるままとい

う感が強い」

4-2

「実践に対する振り返りがまだ弱く、課題も多い」

4-3

「学校の様子や、教師の指導方針等は伝わっているようだが、もう少し、いろんな情報網を駆使して、保護者が読んで得する内容が盛り込めればいいと考えるから」

資質向上を目的にしながらも、日々の多忙な業務に追われて、思うように目的を達成できていない(4-1)という反省や、自分の実践に対して、十分な整理分析ができていないこと(4-2)、保護者に提供する情報の質がまだまだ低いという自覚(4-3)がうかがえる。

「達成されている」「まあまあ達成されている」と判断した理由としては、次のような内容が挙げられている。

4-4

「間違いなく、子どもたちを見る目を養う上で、効果的な教師修行の一つだと言えます」

4-5

「カメラを向ける機会が増え、子どもたちのほんのわずかな変容も見逃すまいと意識するようになったため。通信を作成しながら、自分の実践を振り返り、分析し、今後の指導を考察しようとする習慣が身についたため」

4-6

「実践を振り返る機会になっているから。書く＝考える」

学級通信を書くことが、子どもをとらえる目を向上させることにつながっているという自覚がうかがえる(4-4、5)。また、実践を振り返る貴重な機会となっていることが、資質向上につながると受け止めている(4-5、6)。

学級通信を発行する目的として、1人だけ、次の点を挙げた教師がいた。

「職員の啓発・研修に資するため」

この教師は、特別支援学級担任であり、他の職員の特別支援教育に対する意識が弱いと考え、学級通信を全職員に配付している。達成度は、「まあまあ達成されている」としており、その理由として次のような内容が挙げられている。

5-1

「発達障がいや特別支援教育については、まだまだ理解が進んでいるとはいえない。通信を全職員に配付したことで、子どもの見方や支援の仕方、教材について尋ねられることが多くなった。紹介した教材や書籍を購入する職員が何人か出てきた」

特別支援教育に対する他の職員の意識が変われば、在籍する児童への対応も充実し、それは、特別支援学級の学級経営の充実にもつながっていくと言える。通

常学級であっても、学級通信の内容によっては、他の職員に配付することが学級経営の充実につながる場合があると考えられる。

(2) 掲載する内容と工夫

学級通信に掲載する内容として、全員が選択したのが、「授業の様子」「子どもの生活」「教師の自己開示」である。特に優先順位の上位にあるのが、「子どもの生活」(1位選択6人、2位選択3人)、「授業の様子」(1位選択3人、2位選択2人)である。ここからは、学校における子どもの生活の様子や授業の様子など、保護者が知りたくてもなかなか知ることが困難な内容を伝えようとする意図が見える。また、「教師の自己開示」を全員が選択していることから、教師自身を保護者に知ってもらおうことが、保護者との連携に大きな意味をもつという意識がうかがえる。

9人が選択した内容の中で、優先順位の上位を占めているのが、「行事の様子」(2位選択3人、3位選択4人)である。行事をとおして子どもが育つことや学級の一体感が醸成されることが意識されているということであろう。

掲載する内容を伝える時に工夫している点として、全員が選択しているのが、「子どもの様子(言葉や行動など)をわかりやすく伝える」ということである。優先順位を見ても、1位選択6人、2位選択3人と、かなり重要視していることがわかる。選択人数は7人であるが、優先順位の上位に選ばれているのが、「授業の様子(授業の展開、教師の発問、子どもの発言など)をわかりやすく伝える」である(2位選択5人、3位選択2人)。

保護者にとって、関心が高いと思われる「子どもの様子」「授業の様子」について、できるだけわかりやすく伝えたいと考えている教師が多いということである。

(3) 学級通信発行の手応え

学級経営の重要なツールとして、学級通信を位置づけている教師が、「学級通信を発行してよかった」と思うのはどのような時だろうか。

自由記述であるが、内容を分析してみると、大きく次の5つに分類できた(カッコ内の数字は、書かれていた項目を5つの観点で分類してカウントしたものである。一つの項目で複数挙げている教師もいるため調査対象者の12を上回る数になっている項目がある)。

- ① 保護者からの反響 (11)
- ② 子どもの成長 (7)
- ③ 教師自身の成長 (14)
- ④ 同僚への影響 (3)
- ⑤ 達成感 (3)

この中で最も多かったのは、「教師自身の成長」で

あった。

次のような内容が書かれていた。

6-1

「学級通信で紹介するに足る教育実践と子どもの変容を生み出そうという意欲が沸いてくる時」

6-2

「授業記録を残していた場合、同じ学年・単元を授業する際に、これ以上の授業をするぞ、という目標になる」

6-3

「初任の時の通信と比べて、進歩を感じたとき」

6-4

「クラスのことをマイナス面ではなく、プラス面で見ようとする気持ちで話題を探すようになったことに気づいたとき」

学級通信を発行するという行為が、より高いレベルの実践への意欲につながっていること(6-1、2)、過去の実践が、通信という形で残されていることで、自分の進歩を、より客観的にとらえられること(6-3)、子どもの見方に大きな変化が見られるようになったという自分自身の成長を実感できること(6-4)につながっていることがわかる。

「教師自身の成長」の次に多かった、「保護者からの反響」も、学級通信の発行を支える大きな要素になっていることが、次のような記述から伝わってくる。

7-1

「保護者の方から、通信を読むのが楽しみ。学校の様子や授業の様子が分かるので、安心できる、というようなコメントをもらったり、聞いたりしたとき」

7-2

「子どもは全然学校のことを話さないから、先生の通信で学校の様子が分かります、と言われたとき」

7-3

「保護者から、通信を読むのが楽しみだ、通信を読むために眼鏡を買い直した、通信のお陰で力づけられている、などの言葉をいただくと、正直うれしい」

7-4

「写真を多用しているので、先生が子どもたち(特にうちの子)のことを、いつもよく見てくれている、と感謝される」

7-5

「家でも、学級通信を読んで、〇〇について話し合いました、などの声や手紙が届いたとき」

このように、保護者からの反響があるということは、それだけの内容を実践して通信に書かなければならないということであり、それは、当然、学級経営の充実につながるであろう。

「子どもの成長」という観点では、次のような記述があった。

8-1

「作品や子どもたちを通信に登場させることで、子どもたちが喜んだり、自信をもったりすることにつながっていると感じる瞬間」

8-2

「子どもの日記の中に、担任の考えが反映した記述が見られる。それは、担任が話したことを、さらに通信で書いて読み聞かせることで、子どもたちの理解を助け、子どもたちの日常に生きるようになったためだと思う。そんな時に、学級通信を書いてよかったと思う」

子どもの自己肯定感の高まりや担任の教育観の子どもへの浸透を感じたとき、学級通信を発行した手応えを感じている。子どもの成長は、担任の最も大きな喜びであり、学級通信が、そのための大きな役割を果たしているということであろう。

4 学級通信の分析

調査対象とした教師から、「学級経営を充実させるために、特に意味が大きかったと思われる学級通信」を提供してもらった。そこで、ここでは、学級通信の具体例を挙げながら、「学級経営における学級通信の役割」について考察していく。

(1) 意外な場面：「これがクラスの休み時間です」

保護者は、学校で子どもがどのように過ごしているかについて関心が高い。

だから、学級通信が、学級経営を充実させるために大きな役割を果たすと考えている教師は、ただのお知らせや抽象的な子どもの様子ではなく、できるだけ具体的な子どもの姿を伝える努力をする。それは、授業の場面であったり、行事の場面であったりする。しかし、この通信では、「休み時間」という意外な場面を取り上げている。

休み時間は、子どもにとって重要な時間であるが、教師にとっては、あまり重要な時間であるという意識はない。だから、休み時間の様子を学級通信に取り上げて書く教師は、ほとんどいないと思われる。

なぜ、「休み時間」を取り上げたのかについて、次のように述べている。

家では見ることはできないふだんの学校の子どもの様子を保護者は知りたがっている。ある時間を切り取って詳細に伝えることで保護者を安心させることができる。

参観日では、授業の様子は見るだろうが、休み時間の様子を意識してみる保護者は少ないだろう。しかし、考えてみれば、子どもが自由になる休み時間を、我が子がどう過ごしているか、気にしている保護者は多いはずである。「ひとりぼっちではないのか」

「いじめられているのではないか」「悪さでもしているのではないか」…。このような心配をしている保護者に、休み時間の様子を伝えることは、安心につながるだろう。

実際の学級通信では、4枚の写真が活用されている。3枚は、「読書」「マンガ描き」「塗り絵」など、一人で何かをしている様子が取り上げられている。一人で過ごしている子ども、思い思いに楽しく過ごしていることが伝わり、一人だからと言って心配しなくても大丈夫というメッセージが伝わってくる。「塗り絵」をしている写真には、次の文がつけられている。

塗り絵ノートをもって子どもがいます。

素敵なイラストにいていねいに色鉛筆などでぬっています。

上手な字を書くための筆圧を鍛える訓練にもなるので、とてもいいことだと思います。

梅雨の時期は家で一人で塗り絵もいいかもしれません。

「塗り絵」をしている子どもの行動に意味づけ（「上手な字を書くための筆圧を鍛える訓練にもなる」）をし、家庭での過ごし方のヒントまで示している。

このような意味づけをすることは、保護者が学級通信を楽しみにする大きな要素となる。保護者にとって、「塗り絵」が、これまでとはちがって見えてくるようになるからである。

これが、ただ「塗り絵をしている子どもいます」という紹介だけで終わっていたら、何の印象も残さない学級通信になってしまっていたことだろう。さらに「ていねいに」という表現で、取り上げた子のよさをさりげなく伝えている。保護者は、うれしく感じたのではないだろうか。

この後、この学級では、「塗り絵」をする子が激増したという。意味づけが効果を発揮したのである。

もう1枚は、「グループでゲームに興じている様子」の写真である。ゲームに熱中している写真と「男女一緒に大いに盛り上がっています」という文がマッチして、学級の雰囲気よさを伝える効果を生み出している。

(2) 事件を報告する：「どんな気持ちかな？」

学級で発生した事件を、学級通信で取り上げるとは、教師にとって大きなリスクとなる。一步間違えば、教師の指導力のなさを、保護者に宣言するにも等しい行為となるからである。

だから、学級で発生するさまざまトラブルや事件を、なるべく外に出さないようにするのが、多くの教師に見られる傾向である。

ところが、この教師は、大きな決断のもとに、学級で発生した事件を、学級通信で取り上げた。そして、結局は、この決断が、学級経営の充実につながったと

とらえている。

事件の様子は、次のように学級通信に掲載された。

「どうしたの？」

こう聞くと、「うつりそう」という理由で、Aくんのことをさけていた子が何人もいたことが分かりました。学校に来るのを楽しみにしていたAくんの気持ちを思うと、私は辛く、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

「悲しい思いをさせてごめんね」

担任として、守ってあげられなかったことが、本当に申し訳なく、やっと絞り出した言葉でした。そして、このようなことを絶対許してはいけない！と強く思いました。私は、黙って子ども達を見つめました。

この学級通信を発行するに至った経緯を、次のように述べている。

これまで、学級通信は、お知らせや嬉しい出来事の報告ばかりで、当たり障りのない内容ばかりを書いていた。しかし、この通信では、学級で起こった事件を取り上げた（被害にあった児童の保護者より希望があったこともあり）。このような通信を書いたのは、初めてだった。

最初に書いたときには、あまりにも記述が生々しく、読むに堪えないと言われた。指導を受け、何度も書き直した。オブラートに包みすぎてもいけないし、露骨すぎてもいけない。言葉にすることの難しさを感じた。

この通信を読んだ保護者から電話があった。よいことばかりでなく、悪いことも載せたことについて、共感のお電話だった。この通信によって、本音を書くことを恐れないようにしようと思うようになった。

学級で発生した事件を、学級通信に掲載するという大きなリスクを冒したことが、保護者の共感を得ることにつながっている。そして、教師に大きな成長をもたらす結果となった。

学級での出来事のすべてをありのままに知らせることが、必ずしもよいわけではない。しかし、学級の成長にとって大きな転機になると判断できる場合には、内容を十分に検討した上で、学級通信に取り上げることも意義があることをこの事例は示している。

(3) 高いレベルを示す：「白熱学級会」

教師の仕事は、子どもを育てることである。それは、現在のレベルよりもはるか高いレベルに、子どもを導くということである。高いレベルに子どもを導くには、教師自身が、高いレベルのイメージを具体的にもっていなければならないし、そこに到達させるための指導技術が伴っていないなければならない。そのような教師の力量を示すことができたときに、子どもも保護者も、教師に敬意を払い、その指導についていこうとする姿勢が生まれてくる。

「白熱学会」を学級通信で取り上げた教師は、次のように述べている。

4年生での指導の一端を示した学級通信。話合い一つとっても、3年生のレベルとは違うことを保護者に伝えた。これを読んだ保護者は、4年生になるとこんな高度な考え方を指導してもらえるのかと驚いていた。本年度受け持ちの子どもは、もともとレベルが高く、子どもも保護者も「普通の教育で十分」といった怠惰な安心感がある。それを打ち崩し、「もっと上のレベルがある」ことを示し、共感を得ることができた。

学級通信には、学級会のある場面での教師の指導した言葉が、次のように再現されている。

「今の話合いで多数決をとれば、一人か二人の差で決着がつくでしょう。でも、それで負けた方は心の底から納得できるでしょうか。話合いとは白黒をはっきりとつけることではありません。賛成・反対の二派が十分に意見を言い、お互いの考えを知った上で、互いの考えのいい部分を取り入れて歩みよることです。少数派のひなさんが、いい意見を言っていました。こうすればできるという意見です。そういう意見も取り入れて、白か黒ではなく、灰色を見つけていく。AかBではなく、Cという考え方をつくっていく。それが学級会です」

話合いとは何なのかを、教師自身が高いレベルで認識していなければできない話である。

このような指導を、機会を逃さずできる教師だけが、子どもを高いレベルに導くことができるのであり、だからこそ、「共感を得ることができた」のであろう。

(4) 教師の自己開示：「パチンコ屋事件」

自己開示は、相手との距離を縮め、親近感や信頼感を高める効果がある。

このような意識をもつ教師は、子どもや保護者に対して、積極的に自己開示を行う。

子どもに対しての自己開示は、学級の中でできるが、保護者に対して、そのような機会をつくることは簡単なことではない。そこで、学級通信を活用しての自己開示を行ったのである。

学級通信で、「自己開示」を積極的に行っている教師は、次のように述べている。

教師の失敗談を載せることで、保護者・児童に親近感をもってもらおうと考え、数年前に始めた。配付後の保護者からの評判はよい。

この教師は、自分の子どもごろの失敗談を次のように赤裸々に描いている。

私の叩いたボールは、視界から一瞬にして消えるほどの異常な軌道を描き、当時青島駅前が開業していた小さな地元のパチンコ屋さんのガラス窓を打ち砕いたのであった。私は焦った。パチンコ屋さんには、大き

な4枚のガラス窓があった。その4枚のガラスには左の一枚から順に「パ」「チ」「ン」「コ」の文字が書かれていた。運悪く私が割ったのは、「パ」のガラスであった。

この後、巻き起こった騒動の顛末が、詳細に描かれている。

自分たちの学級担任が、少年時代に引き起こした事件が、ここまで具体的に、しかもおもしろおかしく書かれていると、子どもたちの心は、グッと担任に引きつけられる。目の前にいる教師も、自分たちと同じく、さまざまな失敗を重ねて成長してきたことが伝わるからである。

保護者も、人間味あふれる学級担任のエピソードに、思わず笑みを浮かべたにちがいない。

自己開示は、子どもや保護者と学級担任の間の距離を一気に縮めてしまう。

(5) 思いをぶつける：「先生は、どんなときに君たちを嫌いになるか」

教師の思いは、授業をとおしてこそ、子どもの心に伝わる。

この教師は、自分の子どもたちへの思いを伝えるために、「先生は、どんなときに君たちを嫌いになるか」をテーマにした授業を行い、それを学級通信に書いた。

次のような授業展開である。

- ① 「先生は、どんなときに君たちを嫌いになるか」予想を書かせる。
- ② 出された予想をすべて黒板に書き、一つだけ選ばせる。
- ③ 子どもの予想を一つずつ消していき、最終的には、すべて消す。
- ④ 子どもの驚きの声を受けて、担任からのメッセージを伝える。

この授業の意図を、次のように学級通信に綴っている。

「どんなときも嫌いにならない」というメッセージを伝えることで、子ども達を少しでも安心させたいと思って、この授業をしました。怒るということ、嫌いになるということは違うということを理解してもらいたかったのです。

担任の思いを、授業をとおして子どもに伝え、それを学級通信で保護者にも伝える。

子どもも保護者も、担任の子どもへの愛情を強く感じたことだろう。この学級通信に対して、保護者から寄せられた感想も多かったという事実からも、そのことがうかがえる。

(6) 子育ての視点を示す：「今川義元流むごい教育とは？」

子育てに悩みをもっていない保護者は皆無と言っていいだろう。教育情報を満載した保護者向けの雑誌が、数多く出版されている現状からも、そのことがうかがえる。

だからこそ、子育てに対する保護者の不安に応えるような内容を学級通信で取り上げる意義は大きい。

子育ての視点を学級通信で取り上げた教師は、次のように述べている。

子育ての基本的な考え方を示すことで、保護者の子育てに対する不安を払拭することができる。

子育てに対する不安を払拭するような学級通信を読んだ保護者は、これまでよりも、一層家庭教育の充実を図ろうとするはずである。

安心できる家庭から送り出された子どもは、学校でも落ち着いて過ごすことができ、このことが、学級経営の安定に与える影響は大きい。

この学級通信で取り上げているのは、今川義元の話である。義元から「竹千代（後の徳川家康）には、むごい教育をせよ」と命じられた家来が、粗末な食事を与え、ほとんど休みなしで武術を教え込む生活をさせたところ、義元が、大変怒って言ったという言葉が、次のように紹介されている。

「人質の竹千代には朝から晩まで、海の幸や山の幸あふれる贅沢なご馳走を好きなだけ与えてやれ。寝たいと言ったらいつでもいくらでも寝かせてやれ。夏は暑くないように、冬は寒くないようにしてやれ。学問がいやだと言うならやらせるな。何事も、好き勝手にさせたらよい」

最後に今川義元はこう言ったそうです。

「そのようにすれば、たいいていの人間はだめになるから」

歴史上の人物のエピソードを効果的に活用して、保護者に子育ての重要な視点を示している。多くの保護者が納得するような子育ての視点を示すことは、家庭の教育力を高め、それは、学級経営の基盤となる。

(7) 行事での育ちを示す：「運動会奮闘記」

行事は、子どもを育てる絶好の機会であるとともに、学級の一体感を生み出す貴重な機会でもある。

行事をとおして、子どもや学級がどのように成長したのかを、具体的な事実で保護者に示すことは、学級担任に対する大きな信頼を得ることにつながる。

このような意識をもっている教師は、行事の報告ではなく、行事の前で子どもや学級がどう育ったかを発信する。

運動会の全員リレーを取り上げた場面では、次のような記述が見られた。

結果として敗れはしましたが、

14分→10分48秒→10分35秒→10分28秒とタイムを縮めてきて、本番では、10分9秒にまで縮めました。

一位の赤団は、私のストップウォッチでは10分3秒だったので、実に6秒差にまで迫っていました。2週間前に16秒あった差を6秒差にまで縮めたのです。もっと言うと、走力差でみたら30秒はあった差を、6秒差にまで縮めました。

全員リレーで一番うれしかったのは、全組み合わせでバトンパスが成功したことです。練習でやっていたことをしっかり本番で決めてくれました。これがうれしかったです。そして、どの子どもも必死で走っていたことも。(略)

終わって思うのは、子どもたちは自分の力を出し切ること、がんばること、そして成長することの喜びを感じてくれたんじゃないかなということです。

この教師は、運動会での成長を綴った通信の効果を、次のように書いている。

運動会本番のがんばりを描写し、普段反応のない家庭からも多くの反応があった。

子どもの成長した姿は、反応のない保護者をも動かす力があるのである。

(8) 叱る基準の共有：「先生が叱る三つの事」

叱るという行為は、教師にとって難しいことの一つである。叱り方によって、教師と子どもの人間関係は大きく影響される。教師にとってさえ、難しいのだから、保護者にとっては、もっと難しいことである。だから、一歩間違えると、児童虐待に発展しかねない危険性を孕んでいる。

だから、教師の叱る基準を明確に示し、保護者と共有することには、大きな意味がある。

この通信が発行されたのは、4月12日。始業式後、一週間という早い時期である。

「先生が叱る三つの事」と題して、次の3点を挙げている。

- ① ゴールに向かって全力を尽くさないとき
- ② 卑怯なことをしたとき
- ③ 誰かを傷つけて喜んでいるとき

そして、この3つについて、具体的に説明を加えている。例えば、③については、次のように書いている。

いじめ、悪口、陰口、嫌なことを書いた手紙回し…。全て、やる方は「楽しい」んだと思います。

こうしたことを許していたら、クラスも学校も、崩壊します。何より、それをされた方は、たまったものではありません。③は絶対に許しません。

叱る基準を示し、守れない子どもには、厳しく対処する。このような教師の凛とした姿勢が、学級に安定感をもたらすのである。

5 学級通信の役割

学級経営における学級通信の役割について、考察してきたが、ここから言えることは、次の点である。

- ① 学級経営を充実させるために、学級通信を重視している教師は、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」など、学級通信を発行する意図を明確に意識している
- ② 子ども成長を具体的にとらえ、学級通信を、子どもの成長を積極的に発信する場として活用することが、保護者の大きな信頼を得ることにつながり、それが、学級経営の充実に結びつく。
- ③ 学級経営において重要役割を果たす学級通信を生み出すためには、「子どもの生活の様子」や「授業の様子」を重視することが大切である。それによって、子どもの成長を具体的にとらえることができるようになり、子どもの自己肯定感を育むとともに、保護者からの信頼感を高めることにつながる。

学級経営の充実に大きな役割を果たす学級通信を創り出すためには、子どもの成長を促すような教育活動を生み出す教師の力量が不可欠であるということである。

【参考文献】

- 原田稔、谷田川和夫『学級通信活動のすすめかた』（あゆみ出版1979年）
- 鈴木美子『学級通信づくり入門』（あゆみ出版1989年）
- 村田栄一『学級通信このゆびとまれ』（社会評論社1979年）
- 向山洋一『学級集団形成の法則と実践 学級通信アチャラ』（明治図書1984年）
- 向山洋一編『法則化学級通信シリーズ1～12』（明治図書1987年）
- 上条晴夫『小学校もらってうれしい！学級通信のつくり方アイデア30』（ぎょうせい2009年）
- 河田孝文『子どもと保護者をとりこにするプロの学級通信』（明治図書2009年）